奈文研との学術交流に参加して

中国社会科学院考古研究所と奈良文化財研究所は1991年より長期にわたって共同研究を実施してきました。中日両国の文化交流史に関する学術研究を促進し、中日の友好関係をより確かなものにするために、2017年に改めて「友好共同研究議定書」を締結しました。両研究所の人員が相互に訪問し、関連する遺跡や遺物の調査研究に参加し、適切な研究課題を選択し、共同研究を継続的に進めることを目指します。こうした枠組みのなかで、2018年11月15日から12月14日まで日本を訪問し、学術交流をおこないました。

日本滞在中に実施した主な仕事は以下の３点です。①東大寺東塔院および平城宮東区朝堂院の発掘調査、②飛鳥時代から平安時代の都城遺跡と寺院遺跡、中日文化交流に関連する遺跡や遺物の調査、③中国鄴城遺跡に関する最新の発掘調査と研究成果の報告。

短期間ではありましたが、日本の発掘調査や資料整理の方法を学ぶことができ、自国での発掘調査や研究について改めて考えるきっかけとなりました。関連する遺跡の見学や博物館での資料調査では、考古学や歴史学の情報収集に注力するだけではなく、遺跡保護や展示活用の視点から日本の博物館における展示設計、遺跡公園の建設や管理運営についても注目しました。今回の学術交流を通じて、日本の都城考古学についての認識を深めることができ、今後、都城考古学研究を進めていく上で大いに参考となりました。

最後に、今回の滞在中、多くの日本人研究者と知り合い人脈を広めることができました。今後も学術交流を通じて、両研究所の共同研究や友好関係が促進発展するよう微力ながら協力していきたいと思います。

（中国社会科学院考古研究所　沈 麗華、
翻訳　今井 晃樹）

平城宮東区朝堂院の発掘調査現場にて（前列右から3人目）

薬師寺文書の調査

歴史研究室は、薬師寺の古文書調査を、1980年以来の長きにわたって、東京大学史料編纂所（以下、史料編纂所）と協力して続けてきました。やっと古文書の全体像がみえてきましたので、2018年度に、目録の第１冊目を刊行することにしました。改めて史料編纂所と連携研究の協定を結び、両所の共編という形で刊行することになりました。

薬師寺は奈良時代以来の寺院ですが、火災や戦乱の結果、古代の古文書は散逸してしまいました。しかし、中世以来の古文書が多く残っています。寺院運営のために書き留められた記録や、戦国大名の書状等からは、当時の社会を生き生きと読み取ることができます。また、古代以来の法会を、戦乱の時代にも絶えることなく、連綿と実施してきました。そのような法会の記録や文書のありようからは、古代薬師寺の息吹が感じられます。そして時代とともに少しずつ変化しながら現在にいたっている様子をうかがうことができます。現在も春に花会式がおこなわれていますが、そのような法会の背後には、長い歴史が隠れているのです。

その歴史を読み解くカギとなるのが古文書です。それを広く利用できるように、日々、古文書解読に精を出しています。　（文化遺産部　吉川 聡）

室町から桃山時代の薬師寺法会関係文書